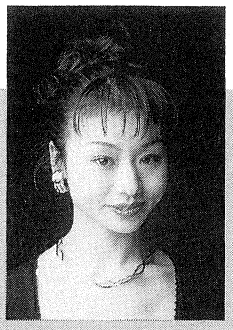
寄稿 1

クラシックバレエにおける伝承芸術

バレリーナ
下村由理恵



平成二年度の文化庁派遣在外研修員として一年間、英国のバーミンガム・ロイヤル・バレエ団で研修ができるという幸せな機会を与えられ、それから私自身の中でいろいろな出会いがあったように思う。すばらしい芸術家たちとの出会い、そして厳しい目によって、本物の芸術に触れたことは、私の中で大切な財産となっているのは確かである。

現実に長い伝統のある英国のクラシックバレエの世界に入ると、長い年月をかけて偉大な芸術家たちが創り上げてきたこの伝承芸術のすばらしさは、日本でいう歌舞伎と同じであり、大切に大切に次の世代へと受け継がれていっているのを強く感じる。

私は現在、permanent Guest DANCER として契約を結び、日本と英国スコティッシュ・バレエ団とで踊る場を与えていただいている。

五年前の研修中、英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団にゲストティーチャーとして教えに来ていた英国スコティッシュ・バレエ団のディレクター、ガリーナ・サムソヴァ女史に出会うことができ、その出会いによって、今の私があるといって良いと思う。サムソヴァ女史に出会えるというきっかけを与えていただいた日本バレエ協会の島田廣会長をはじめ、理事の先生方の推薦のもと、文化庁の在外派遣制度という芸術家たちにとって自分の希望する外国で研修をさせていただけるというシステムに感謝するばかりである。人と人との交流が、いかにすばらしい刺激としてまた、必要なことであるのかを学ばせていただいた。

高度な舞台芸術を求める場合に、芸術家たちが日頃の努力の成果を発揮する場（もちろん、ダンサー側の人並みならぬ個人の努力は当然であるが）が、日本は外国に比べると、少なすぎるという問題がある。

平成八年度の日本の文化予算が約七五〇億円であり、それに対してフランスは約二、九六五億円、イギリスは約一、九二三億円というものを見てもわかるように、日本は一桁違う。ただ、このところ少しずつアップしてきているのも現実であろう。

高度な芸術作品を創るために費やすお金と時間は、それは大変なものであるし、また当然でもある。外国のバレエ団で、それぞれの役割のスタッフたちと作品を創り上げる段階では、中途半端は許されない。それぞれが強い責任を持って合同制作に取り組むのである。

私のように踊る側の立場にある人間は、演出・振付家、そして音楽家（指揮者）と一番に接するのだが、その公演（作品）で求められていることを、いかに確実に素早くキャッチし、満足のゆく結果を舞台上で演じられるか、それは個人の責任であり、自分自身との戦いがあってこそ、高度な芸術作品に近づけるのではないだろうか。

芸術というものは、偽りのない世界であり、舞台という空間はすべてが出てしまう恐ろしい場でもある。

だから人々が一緒に涙を流し、笑い、感動し、またその瞬間を求める客層の幅広さが、この本場の国際文化に触れたとき、はっきりと身にしみて感じたことである。

たくさんの知識を学び、いろいろな分野の人々との交流、その出会いによって得たものをこの芸術の世界で発揮できれば最高であろう。

私たち世代に求められている大切な役割、それはレベルの高い芸術作品を残してゆくことと同時に次の世代へ伝えてゆくことであり、そのことの大切さを身にしみて感じているこの頃である。